



腎臓病診療でおさえおきたい Cases 36

慶應義塾大学腎臓内分泌代謝内科 編
伊藤 裕 編代表
脇野 修, 徳山博文 責任編集

● B5 頁 352 2019年4月

定価：本体 6,000 円＋税

[ISBN978-4-260-03850-8] 医学書院刊

腎臓病診療には血尿、蛋白尿、腎機能の低下といった臨床所見、その原因となる疾患の臨床検査、さらに腎生検で得られた腎組織を免疫組織化学、光学顕微鏡、電子顕微鏡で探索することによって病因診断がなされ、それらは有機的に関連した複雑な診断体系となっています。

その中でも病理診断は重要な位置を占めており、腎組織のスナップショットから病態、さらにその時間的・空間的な経過を説明できるようになるにはかなりの時間と訓練が必要だと思います。本書の序文でも述べられていますが、腎病理診断は人工知能(artificial intelligence: AI)に完全に置き換わってしまうのでしょうか？腎臓病にはまだ確立していない疾患概念があり、臨床症状、検査所見、病理所見から新しい疾患概念を提出することは、まさしくクリエイティブな仕事であり、AIには不可能だと思います。また腎疾患の経過を腎生検組織から読み取って、患者さんの病態の「物語」を構築し、それを患者さんの心にわかりやすく響かせることもAIには不可能です。さらに腎疾患診療における答えのない臨床的ジレンマに対峙した時、問題解決能力を発揮して患者さんを導いていくこともAIには困難だと思います。つまり腎臓病診療には「人間的な仕事」が多く残されています。

慶大腎臓内分泌代謝内科における選び抜かれた腎生

検症例 36 例は、AI にできない「人間的な腎疾患診療」を行うための道場になっています。症例集やコラムには「原発性アルドステロン症による masked CKD」「免疫チェックポイント阻害薬による腎障害」「糖尿病性腎症の始まりは近位尿細管」「IgMPC-TIN という新しい疾患概念」など新たに認識された病態や疾患概念がわかりやすく述べられています。またそれぞれの症例提示が病歴、検査所見、プロブレムリスト、腎生検所見、プロブレムリストに関する考察と「物語性」をもって一気に読み進めることができます。さらに、症例提示の最後にある「臨床医として考察を要するポイント」は臨床医の病態の理解に役立つだけでなく、診療上の多くの臨床的ジレンマも取り上げられており、問題解決能力の向上をもたらすものと思います。

困った症例に遭遇したときに本書を手にするのもよし、また美しい腎組織とカラフルな経過表を楽しみながら通読するのもよし、本書の使い方は読者の皆様の選択と思います。36 例の症例をまとめ上げるには並々ならぬ努力が必要であったと思います。慶大の伊藤裕教授、脇野修准教授、徳山博文専任講師、および教室員の皆さまの努力に敬意を表するとともに、多くの腎臓内科医、さらには腎臓内科を志す医師にぜひ読んでいただきたいと願ってやみません。